

現代版戯作『オリリンピック』 十十

池田 隆

明日、「一口ナ克服の証」と謳った東京オリリンピックの開会式が催される。老人がひとり、ソファーでうつらうつらと夢の中。

開会式のハイライト演目、世界各国の紙幣を模した紙吹雪が無観客の競技場に舞う。必死にそれを拾う者、歌や酒に興ずる群衆、乱痴気騒ぎが繰り広げられる。スタンド後方より太陽を表す大きなリング状のバーナーが昇り始めた。内向きに勢いよく真紅の炎を吹出している。

その縁から悪魔の仮面をつけた聖火ランナーがトーチに火をつけ、競技場のなかを駆けまわる。急に暗く静まり返り、乱痴気騒ぎの連中が互いに距離を取り、マスクをつけて屈み込む。葬送行進曲が流れ、黒い衣を被った者が競技場から出ていく。

勝ち誇った聖火ランナーが聖火台に登り、点火。炎がめらめらと妖しく燃え上る。そこへ空中から大きなワクチン注射器が登場、放水すると火は瞬く間に消え、ライトが点灯しグラウンドにいる大勢の連中が両手を挙げて喜びを示す。

目を閉じたまま意識は夢から現へ。ヘルシンキ五輪以来、四年毎にラジオやテレビに向い一喜一憂してきた。サッカーファンが地元チームを応援するように、その期間中は愛国者となった。しかし個人的に五輪とは直接の関りもなく、何時何処で誰が活躍したか等、あまり覚えていない。ただ若い頃に毎週、代々木オリリンピックプールで妻と泳ぎ、駒沢競技場の周囲を子供たちと走った記憶は懐かしい。今もOBペンククラブに出るため国立オリリンピック記念青少年センターへ通っている。レガシー施設よ、ありがたう。

スポーツとは人間の肉体的闘争本能のはけ口でもある。集団殺戮をも辞さない戦争の代替手段として役立つてきた。古代オリリンピックの開催中は都市国家間の戦争を中止した。その精神を受け継いだ近代オリリンピックは国際友好と国威発揚の両面の性格をもつ。スポーツ大会で大勢の人の命が助かり、膨大な戦費が減れば有難い話だ。

さて小難しい話は横へ置き、明日からの十七日間はテレビを見ながら人体の躍動美を存分に楽しもう。

再び夢の中へ。閉会式、無事に競技を終えた各国の選手たちがマスクを外し、八グしたり腕を組んだりと、入り乱れての悦び様。「もう罹るなら罹っても構わない」と聞き直っている。そこへ『微量トリチウム入り安全ビール』と書かれた放水車が現れ、優勝祝賀会のビール掛けのように、彼らの頭へシャワーを浴びせる。

場内放送が流れ始める。「クーベルタン男爵は『参加することこそ意義がある』と述べました。これから選手の方々全員に参加賞として金メダルにも優る素晴らしいメダルを差し上げます」とのアナウンスに歓声は一層高まる。

続けて「今回のオリリンピックは震災復興を祝う大会でもあります。お渡するメダルは復興の証となった金属から作りました。それを御覧に入れます」。興味津々の顔、顔、顔。

銀白色に輝く金属の塊が運び込まれて来た。そこには『大震災で停止し、昨今ようやく再稼働した原発から取り出したプルトニウム』と書かれている。それを見た瞬間、選手全員が青ざめ、競技場から一目散に逃げ出し閉会となる。

老人も必死で逃げ出そうとするが出口がない。恐怖のあまり突然夢から目覚める。しかし呼吸はいまだ激しく弾んでいた。